　　水の東西　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山崎正和

〔　〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　　【標準問題１】

「おどし」が動いているのを見ると、そのの中になんとなく人生のけだるさのようなものを感じることがある。かわいらしい竹のシーソーの一端に水受けがついていて、それにの水が少しずつたまる。静かに緊張が高まりながら、やがて水受けがいっぱいになると、シーソーはぐらりと傾いて水をこぼす。緊張が一気にとけて水受けが跳ね上がる時、竹が石をたたいて、こおんと、くぐもった優しい音をたてるのである。

　見ていると、単純な、緩やかなリズムが、無限にいつまでも繰り返される。緊張が高まり、それが一気にほどけ、しかし何事も起こらなトロウがまた一から始められる。ただ曇った音響が時を刻んで、庭の静寂と時間の長さをいやがうえにも引き立てるだけである。水の流れなのか、時の流れなのか、「鹿おどし」は我々に流れるものを感じさせるそれをせき止め、刻むことによって、この仕掛けはかえって流れてやまないものの存在を強調しているといえる。

　私はこの「鹿おどし」を、ニューヨークの大きな銀行の待合室で見たことがある。日本の古い文化がいろいろと紹介される中で、あ素朴な竹の響きが西洋人の心をひきつけたのかもしれない。だが、ニューヨークの銀行では人々はあまりに忙しすぎて、一つの音と次の音との長カンカクを聴くゆとりはなさそうであった。それよりも窓の外に噴き上げる華やかな噴水のほうが、ここでは水の芸術として明らかに人々の気持ちをくつろがせていた。

　流れる水と、噴き上げる水。

　そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向コらして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋めつくしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず、壮大な水の造型がとどろきながら［　Ａ　］しているのに私は［　Ｂ　］をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音をたてて空間に静止しているように見えた。

　［　Ｃ　］的な水と、［　Ｄ　］的な水。

問一　二重傍線ａ～ｃの片仮名を漢字に直しなさい。

問二　［　Ａ　］に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

　　　①　直立　　②　乱立　　③　起立　　④　林立

問三　［　Ｂ　］に入る語として最も適切なものを、漢字一字で書きなさい。

問四　［　Ｃ　］・［　Ｄ　］に入る語句として最も適切なものを、文中からそれぞれ漢字二字で抜き出しなさい。

問五　傍線１「なんとなく人生のけだるさのようなものを感じる」とあるが、筆者は「鹿おどし」のどのようなところにそう感じるのか。文中から二か所探し、初めと終わりの五字を抜き出しなさい。（字数には句読点を含む。）

問六　傍線２「曇った音響が時を刻」むとは、何のどういう様子をいうのか。答えなさい。

問七　傍線３「それ」は何を指すか。文中から抜き出しなさい。

問八　傍線４「素朴な竹の響き」と対照的な語句を文中から六字で抜き出しなさい。

　　水の東西　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山崎正和

〔　〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。　　【標準問題２】

　流れる水と、噴き上げる水。

　そういえばヨーロッパでもアメリカでも、町の広場にはいたるところにみごとな噴水があった。ちょっと名のある庭園に行けば、噴水はさまざまな趣向を凝らして風景の中心になっている。有名なローマ郊外のエステ家の別荘など、何百という噴水の群れが庭をぎっしりと埋めつくしていた。樹木も草花もここでは添え物にすぎず壮大な水の造型がとどろきながら林立しているのに私は息をのんだ。それは揺れ動くバロック彫刻さながらであり、ほとばしるというよりは、音をたてて空間静止しているように見えた。

　時間的な水と、空間的な水。

　そういうことをふと考えさせるほど、日本の伝統の中に噴水というものは少ない。せせらぎを作り、滝をかけ、池を掘って水を見ることはあれほど好んだ日本人が、噴水の美だけは近代に至るまで忘れていた。伝統は恐ろしいもので現代の都会でも、日本の噴水はやはり西洋のものほど美しくない。そのせいか東京でも大阪でも、町の広場はどことなく間が抜けて、表情トボしいのである。

　西洋の空気は乾いていて、人々が噴き上げる水を求めたということもあるだろう。ローマ以来の水道の技術が、噴水を発達させるのに有利であったということも考えられる。だが、人工的な滝を作った日本人が、噴水を作らなかった理由はそういう外面的な事情ばかりではなかったように思われる。日本人にとって水は自然に流れる姿が美しいのであり、圧縮したりねじ曲げたり、粘土のように造型すタイショウではなかったのであろう。

　言うまでもなく、水にはそれ自体として定まった形はない。そうして、形がないということについて、おそらく日本人は西洋人と違った独特の好みをもっていたのである。

「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前感性によって裏づけられていた。それは外界に対す受動的な態度というよりは、積極的に、形なきものを恐れない心の現れではなかっただろうか。

見えない水と、目に見える水。

　もし、流れを感じることだけが大切なのだとしたら、我々は水を実感するのにもはや水を見る必要さえないといえる。ただ断続する音の響きを聞いて、そ間隙に流れるものを間接に心で味わえばよい。そう考えればあの「おどし」は、日本人が水鑑賞する行為キョクチを表す仕掛けだといえるかもしれない。

問一　二重傍線ａ～ｅについて、漢字はその読みを平仮名で書き、片仮名は漢字に直しなさい。

問二　波線Ⅰ「静止」、Ⅱ「感性」、Ⅲ「受動」の対義語を、それぞれ漢字で書きなさい。

問三　傍線１「壮大な水の造型」を、筆者は何にたとえているか。文中から十字以内で抜き出しなさい。

問四　傍線２「そういう外面的な事情」とは何か。文中から「～ということ。」に続く形で二か所抜き出しなさい。

問五　傍線２に対して、日本人が噴水を作らなかった内面的な理由を述べている一文を文中から探し、初めの五字を抜き出しなさい。

問六　傍線３「見えない水」とは、具体的には何を指すか。考えて答えなさい。

問七　筆者の考えと合致しないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

　　　①　日本人は、自然に流れる水に時間をも感じるような、形のないものを間接的に捉える感性をもっている。

　　　②　噴水は、水を人工的に噴き上げさせることによって、空間的に見て味わうものとする装置である。

　　　③　日本人は目に見えないものを積極的に恐れない、すなわち好ましく感じる心をもっている。

　　　④　鹿おどしは水の流れる姿に目を凝らすことによって、そこから水や時間の流れを感じ取る仕掛けである。